

埋文にいがた

No. 49
2004. 12. 24

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

今年度発掘調査の紹介

西部遺跡

(岩船郡神林村大字牛屋字西部 1192 ほか)



西部遺跡全景

西部遺跡は、越後平野の北東部、荒川^{あらかわ}右岸の標高 3 m の自然堤防上に立地しています。日本海東北自動車道建設に係る 5,400 m²について、4 月～12 月にかけて発掘調査を行いました。

調査の結果、平安時代^{へいあん}～室町時代^{むろまち}にかけての集落跡であることがわかりました。ここでは、平安時代末から中世のものについて報告します。

遺構^{いこう}は、井戸^{いど}・溝^{どこう}・土坑^{ほったて}・掘立柱建物跡^{ぼしらたてもの}・ピット群が検出されました。井戸は素掘りのほか、底面に石を敷いたものも見つかっています。方形に巡る区画溝も見つかり、区画内のピットは建物

跡と考えられます。出土遺物は、珠洲焼^{すず}、輸入中国陶磁器^{せいじ}（青磁^{はくじ}・白磁^{こせ}）、古瀬戸^{こせ}・常滑焼^{とこなめ}などの陶磁器や田舟^{たぶね}・曲物^{まげもの}・漆器碗等の木製品、漆紙等も見つかっています。

遺跡周辺は小泉荘と呼ばれた荘園が存在した地域であり、当時の阿賀北地域で勢力を誇っていた越後平氏^{あがきた}である城氏^{へいし}の最盛期（12 世紀頃）と遺跡の最盛期が符合することから、今後、西部遺跡と小泉荘及び城氏との関連性についても考えていきます。（調査担当者：山武考古学研究所 折原洋一）



掘立柱建物跡



井戸底の石敷き

しも おき きた
下沖北遺跡
(柏崎市大字下方字下沖38-1ほか)



古代の竪穴住居（発掘途中）

下沖北遺跡は柏崎平野西部に位置し、鵜川^{うかわ}右岸の自然堤防上とその後背低地に立地しています。柏崎バイパス建設工事に伴い平成14年に一部発掘調査を行いました。今年度はその北東側について、9,010㎡（4,505㎡を2層）を6月～11月にかけて発掘調査を行い、その結果古代と中世の遺跡であることが分かりました。

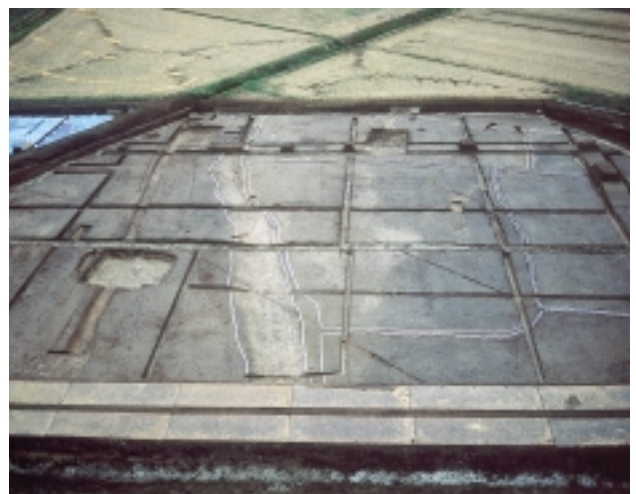
古代の遺跡は自然堤防上に立地しており、竪穴^{たてあな}住居^{じゅうきょ}や溝、土坑などの遺構^{いこう}が見つかりました。竪穴住居は一辺4mほどの方形で、西側の壁際には竈^{かまど}が設けられていました。住居内からは須恵器^{すえき}や製塩土器^{せいえんどき}（海水を煮詰め、塩を作るための土器）が出土しました。須恵器から8～9世紀の住居であることが分かります。溝は約40条見つかりました。溝の中には、同規模（幅70cm、深さ10cmほど）の2条の溝が平行したり、直角に曲がったりしているものもあります。場所を区画するような意味合いがあるのかもしれませんが。このほか製塩土器がまとまって出土した土坑もあります。

中世の遺構には水田跡があります。鵜川の自然堤防と後背低地の地形の変換点に水路を作り、後背低地に水田を設けていました。14世紀頃の土師器^{はじき}が出土していることから、同時期の水田と思われます。また平成14年の調査では、今年度の調査区よりも鵜川に近い地点で13～14世紀の集落が確認できており、今年見つけた水田はこの集落に伴うものと考えられます。

（山崎忠良）



製塩土器が出土した古代の土坑



中世の水田跡

みつまた 三角田遺跡

(上越市大字下野田字三角田 161－1 ほか)

三角田遺跡は高田平野を流れる関川右岸に位置する自然堤防上に立地しています。国道 253 号上越三和道路の建設に伴い、4 月～12 月にかけて発掘調査を行いました。その結果、無遺物層（洪水により堆積したと考えられる地層）を挟んで、奈良時代（下層）と平安時代～江戸時代（上層）の遺跡が発見されました。

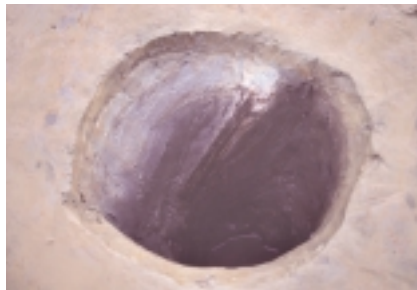
奈良時代の遺跡は、無遺物層に覆われていたため当時の集落の姿が良好に残っており、遺構・遺物が遺跡の東側に限定して存在していました。掘立柱建物 4 棟を中心に畑跡や溝、土坑などが検出され、掘立柱建物の柱穴からは木簡が出土しました。書かれている文字は現在解読中ですが、上越市では初めての出土例でありその内容が注目されます。

平安時代以降の遺構・遺物は遺跡の全域に存在していました。遺構は掘立柱建物、溝、土坑、ピット等で、遺跡の中央では、畑の畝跡と考えられる 300 本を超える溝が発見されました。出土遺物から平安時代のものであると考えられますが、分布範囲が 1,000 m² を超えるような大規模なものは珍しく、その性格が注目されます。

このように、三角田遺跡では奈良時代から江戸時代に至る遺構・遺物が断続的に発見されており、この地が古代以降連続と人々によって利用されてきたことを物語っています。（沢田 敦）



奈良時代の掘立柱建物



木簡の出土状況



平安時代の畑跡

きたおきひがし 北沖東遺跡

(南魚沼市小栗山字北沖 19－3 ほか)

北沖東遺跡は旧六日町内の魚野川左岸に位置し、魚沼丘陵から流れる庄之又川が形成した扇状地と鎌倉沢川が形成した扇状地に挟まれた標高約 165 m の低地に立地しています。一般国道 17 号六日町バイパス建設に係り、9 月～11 月にかけて 2,300 m² を発掘調査しました。

調査の結果、古墳～中世の遺構・遺物が見つかりましたが、遺跡の土壌は洪水による堆積物で形成されており、遺物は他の場所からの流れ込みと考えられます。遺構は溝、杭列を検出しました。溝は古墳時代のものと考えられ、およそ 1 m の幅で南北方向に流れ、下流で自然流路に合流しています。溝の東側縁及び溝内には割材を使った木杭が打ち込まれていました。また、この溝の東側には四辺形にまわる畑の畦に打たれたとみられる杭列も見つかっています。遺物は木杭、建築部材と思われる角材が多く見つかりましたが、鍬先や木製容器なども出土しています。土器は少量ですが古墳時代の小型壺、甕、平安時代の墨書土器が出土しています。

畦畔は見つかりませんでしたが、溝や杭列などの検出、鍬先などの出土から水田跡の可能性が考えられます。

（飯坂盛泰）



四辺形にめぐる杭列



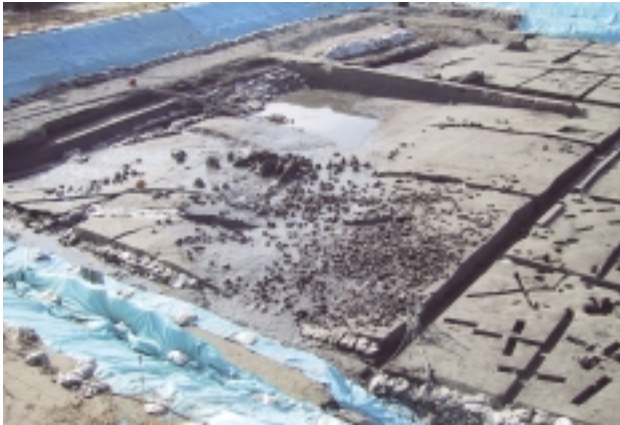
洪水流などの圧力で折れた杭列



鍬先の出土状況

えぞえ 江添遺跡

(北蒲原郡中条町大字大出字江添 873 ほか)



流路跡に捨てられた遺物分布状況



土坑炭化材出土状況

江添遺跡は、新潟平野の沖積部分では調査例の少ない縄文時代後期の遺跡であるとともに、沖積平野での生活の様子を知る上で貴重です。また、調査区域の北側では遺構検出面を切って噴出した噴砂跡が見られたほか、発掘した遺構のほとんどが検出面から深さ 10～30 cmにある砂層を挟んで南東↔北西にズレていることも確認され、古地震の存在と発生時期を知る手掛かりとして注目されます。

(調査担当者：(株)シン技術コンサル 小林晴生)



埋設土器検出状況



地震によりズレたピット

一杯田遺跡 (北蒲原郡中条町大字赤川字一杯田 804 ほか)

一杯田遺跡は、日本海東北自動車道の建設に先立ち、平成16年8月～10月まで発掘調査を行いました。遺跡は、飯豊山地から日本海に向かって流れる胎内川が形成した扇状地の末端にあり、現在の海岸線から約3km内陸に位置します。現在の水田面から3m余り下の包含層（単層）から、古墳時代前期の土器が多数出土しました。土器片の分布は調査区域の西部に偏っており、特に密集する遺物集中区が数か所ありました。土器は、甕類と壺類の破片が最も多く、器台・高坏なども少量ながら存在します。

遺構としては、性格不明の土坑状の落ち込みや溝状遺構が多く、竪穴住居や掘立柱建物などの明確な居住用遺構は発見されませんでした。遺構の分布も土器片と同様、調査区域の西側に集中していました。一杯田遺跡は、今回の調査範囲のさらに西側（海寄り）に広がっていると考えられます。特に調査区域の西部で検出された杭列は、ほぼ東西方向に並び、調査区の西端まで分布しており、調査区域を超えて西に延びていると考えられます。また、この杭列の近くをやや蛇行して走る溝は、杭列とともに遺物の出土範囲の南限に一致し、この遺跡の範囲を区画していたと考えられます。

(調査担当者 加藤建設(株) 熊崎 保)



土器出土状況 1



土器出土状況 2



杭列



埋文インフォメーション



第12回遺跡発掘調査報告会のご案内

～平成16年度の遺跡発掘調査成果を速報します～

期日：平成17年3月6日(日)

会場：三条市中央公民館（北三条駅徒歩3分）

内容：出土品の公開：9:00～16:00

報告会：10:00～15:00 **〈入場無料〉**

〈問い合わせ先〉0250-25-3981

埋文事業団 普及担当 佐藤(弘)まで

ホームページ

<http://www.maibun.net>



交通

☆上越新幹線燕三条駅より車で15分

上越新幹線 | 燕三条駅 | 弥彦線 | 北三条駅 | 弥彦線 | 東三条駅
 車で15分 | 徒歩3分 | 車で15分
 三条市中央公民館

☆北陸自動車道 三条・燕インターより車で15分

☆バス(新潟交通・越後交通) 本町三丁目・本町四丁目バス停より徒歩3分

報告書作成中の遺跡

大塚遺跡（上越市大字灰塚字大塚 834 - 1 ほか）

遺跡は高田平野西縁部の南北に連なる台地上にあり、標高は約55mです。現在は上信越道の上越高田インターとなっています。上信越自動車道建設に伴って、平成7～9年の3か年にわたり発掘調査しました。調査の結果、縄文・古墳・古代・中世各時代の遺構や遺物がみつかりました。

縄文時代の遺構には後期の竪穴住居跡1基（写真）、土坑19基があります。住居跡からは、土器のほか、土偶（写真）や球状土製品が出土しています。土坑には、列状に並んだ径1m程の落し穴（早期）と考えられるものや、貯蔵穴と考えられるフラスコ状のものがあります。遺物のうち土器では、早期の沈線文系土器（貝殻腹縁文）、条痕文系土器、中期初頭の新係系土器、後期中葉の土器等があります。また、石器では石鏃、磨製石斧、打製石斧、石錘、磨石類等があります。特に磨製石斧のうち側面に明確な稜を持たないものが20点近くあり注目されます。多くは蛇紋岩製です。

古墳時代以降では、古代の竪穴住居跡1基、須恵器窯跡1基、土坑、炭窯等があり、遺物では土師器、須恵器、珠洲焼があります。報告書刊行は17年度の予定です。

（高橋 保）



竪穴住居



土偶（高さ約7cm）

炭山遺跡（上越市大字中屋敷字炭山）

炭山遺跡は上信越自動車道上越ジャンクション建設に先立ち、平成8年度に発掘調査を行ないました。遺跡は、標高約25～45mの丘陵先端部に立地しています。

調査の結果、縄文時代早期後半の集石・集石土坑群、縄文時代後期後半の集落、平安時代の土坑、中世の塚が検出され、各時代の遺物が出土しました。特に注目されるのは県内では調査例の少ない、縄文時代後期後半の集落と出土遺物です。

縄文時代後期の集落は竪穴住居4基、フラスコ状土坑、配石遺構1基等から成ります。このうち竪穴住居2基には切り合い関係が認められますが、両者の間に大きな時間差はないようです。出土遺物の時期もほぼ限定されているので比較的短期間に営まれた集落であったと考えられます。出土土器は加曽利B3式を主体とし、これに北陸や信州地方の影響を受けた土器が伴います。珍しいものとしては、器面に巻貝の側面圧痕を装飾された注口土器があります。石器は磨製石斧が数多く出土しました。未成品や砥石も見られるので、蛇紋岩を素材に石斧製作を行っていた可能性もあります。

（土橋由理子）



遺跡全景

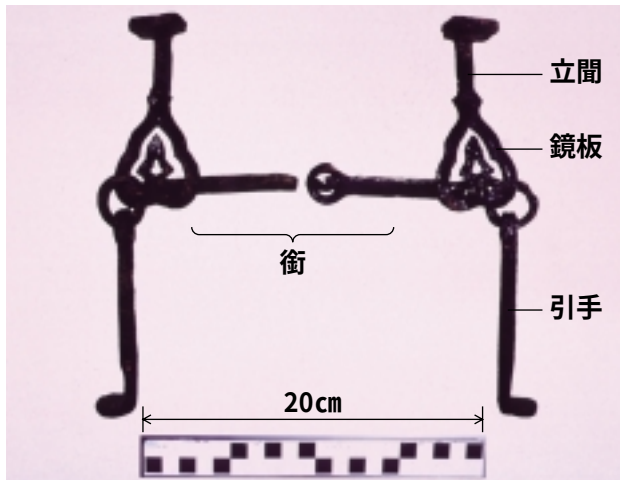


縄文時代後期の竪穴住居

埋文コラム 「発掘から見てきた馬具の歴史」

〈馬の利用〉

朝鮮半島から日本に馬が輸入されたのは古墳時代前期（4世紀頃）と考えられています。馬の遺存体（骨）が広く出土するようになるのは中期（5世紀頃）で、古墳から出土する馬形埴輪や石馬・土製品、馬具の出現時期と一致しています。馬具は、馬を操り装飾するための装具です。後期（6～7世紀頃）になると、古墳の副葬品は実用的な武器や馬具が中心になります。馬は軍事力、行事や祭りなどの儀礼に欠くことができない家畜となっていたことがわかります。古代（奈良・平安時代頃）においては、軍事力のほかに水田の耕作にも馬を用いました。また、騎馬軍団の勢力を高めるため、馬政が整備され国営牧場を設け飼育にあたりました。しかし、中世（鎌倉・室町時代頃）に入ると武士の勢力が強くなり朝廷が経営していた官牧はほとんど武士たちの所有となり、消滅していきます。戦国時代、絵巻物には煌びやかな軍馬が描かれます。軍馬の多くは食料や武器を運ぶ運輸用だったようです。江戸時代に入ると五街道が設置され、宿駅制度に基づいて、輸送される荷物は問屋によって宿駅毎に「継立」し、馬で運搬していました。しかし、時間も運賃も高くつくため運輸専門業者によって行われるようになります。これにより一度に3～4頭の馬を引き、多くの荷物を運搬できるようになりました。このように人々と密接な関わりのあった馬も、モータリゼーション化した現在では出番も少なくなっていました。（今野明子）



書：岩倉遺跡（糸魚川市）出土

乗馬の際、馬を制御するために最も重要な装具です。これは古墳出土の馬具に占める轡の量からわかります。写真は糸魚川市岩倉遺跡出土の中近世の轡です。鏡板は杏葉形に作り二重に透かしを入れています。今では錆びに覆われていますが、轡・引手ともに太くしっかりとした作りになっています。この轡を馬に装着、馬を自由に操っていた姿が目に浮かびます。

はみ 轡

馬の口の中に入れてかます。

ひつて 引手

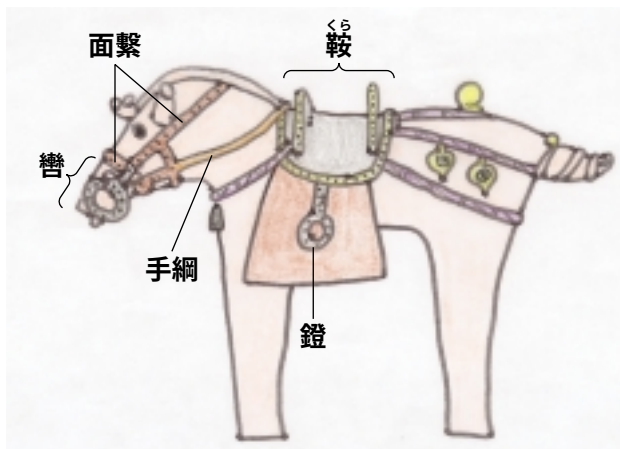
轡の先に取り付けられて手綱を連結する。

かがみいた 鏡板

上部の立間に面繫を繫いで轡と直行するように取り付けることで、轡が左右にずれることを防ぐ。

おもがい 面繫

轡を馬の頭部に固定するための装具。材料が革や組紐など有機質のためほとんど遺りません。



あみ 鐙

乗馬の際の足かけと、乗ってから身体の安定を保つ機能があります。柏崎市箕輪遺跡から奈良時代の木製漆塗壺鐙が1点（埋文にいがた№28－p1参照）、同じ溝から「駅家村」と記された木簡が1点出土しています（同№29－p5参照）。8世紀律令国家は、強固な統一国家をつくるため、現在の国道にあたる7つの官道を整備しました。官道には「駅家」が設けられていて、そこには宿泊所と北陸道では5頭の「駅馬」が常備され、公用の役人は駅馬を乗り継いで旅をしました。馬は、迅速かつ確実な情報伝達手段として活用されていました。

〈引用・参考文献〉

『月刊 考古学ジャーナル』483, 2002』ニューサイエンス社 2002

県内の遺跡・遺物 47

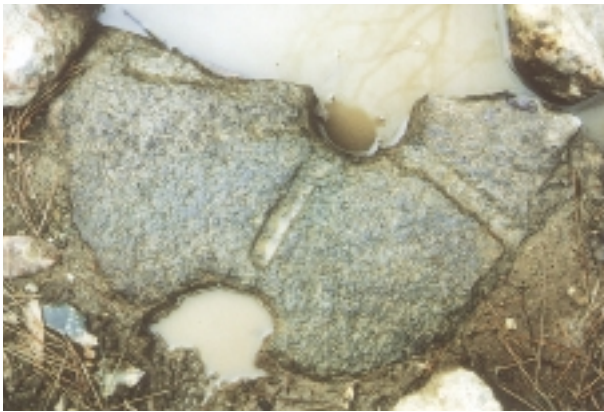
佐渡奉行所跡 出土品一括 (平成12年 県指定)**遺物出土地：佐渡市相川広間町1-1ほか**

佐渡奉行所は、慶長9年(1604)に初代佐渡奉行の大久保長安により設置され、明治元年(1868)に廃止されるまでの約260年間、江戸幕府の佐渡一国支配と佐渡金山経営の拠点として機能しました。平成6年に「佐渡金山遺跡」の一部として国史跡に指定され、平成6～10年にかけて保存整備事業に伴い発掘調査されました。

発掘調査では、大御門から役所玄関に至る石畳や役所礎石の一部、武具土蔵礎石、井戸などの遺構、陶磁器、瓦、木製品などの生活用具とともに、多数の金銀精錬関連遺物が出土しました。このうち鉛の延べ板、荷札木簡、蓋状・棒状土製品、羽口（轆の送風口）、扣石、石磨、船（鉱石の粉碎過程に使用する容器）、桶、筴、鍬（鉱石を溶錬する際に生ずる滓）の金銀精錬関連遺物計471点が県考古資料に指定されました。特に、下磨に物配り（大きな溝）が穿たれている石磨（通常物配りは上磨に存在）、四角い穴がある扣石の形態は佐渡特有と考えられています。

鉱山関連遺跡の調査例は全国的にも未だ少なく、出土遺物も極めて少ないため、佐渡奉行所跡出土の金銀精錬関係遺物は、わが国における近代以前の製錬技術を考察する際の貴重な資料といえます。

(写真・資料提供 佐渡市教育委員会)

**鉛の延べ板出土状況****物配りがある上磨****四角い穴が穿たれている扣石****船****埋文にいがたNo. 49**

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新津市金津93番地1
TEL (0250) 25-3981
FAX (0250) 25-3986
e-mail: niigata@maibun.net
URL: <http://www.maibun.net>
印刷 新高速印刷(株)